

ハタハタ資源対策協議会資料

水産振興センター

表1 漁獲可能量と漁獲実績の推移

年	沖合			沿岸			合計		
	配分枠	漁獲量	実績(%)	配分枠	漁獲量	実績(%)	可能量	漁獲量	実績(%)
平成7年	85	53.8	63.3	85	88.7	104.4	170	142.5	83.8
平成8年	110	86.1	78.3	110	157.2	142.9	220	243.3	110.6
平成9年	180	161.2	89.6	180	290.8	161.6	360	452.0	125.6
平成10年	300	178.4	59.5	300	436.8	145.6	600	615.2	102.5
平成11年	400	143.0	35.8	600	579.1	96.5	1,000	722.1	72.2
平成12年	400	265.7	66.4	600	901.8	150.3	1,000	1,167.5	116.7
平成13年	520	547.8	105.3	780	986.2	126.4	1,300	1,534.0	118.0
平成14年	680	380.1	55.9	1,020	1,570.1	153.9	1,700	1,950.2	114.7
平成15年	960	903.9	94.2	1,440	2,058.6	143.0	2,400	2,962.5	123.4

集計期間：平成9年以前は暦年、平成10年以降は9月～翌年6月

・配分枠に対して、沖合94.2%、沿岸143.0%、全体では123.4%の実績となった。

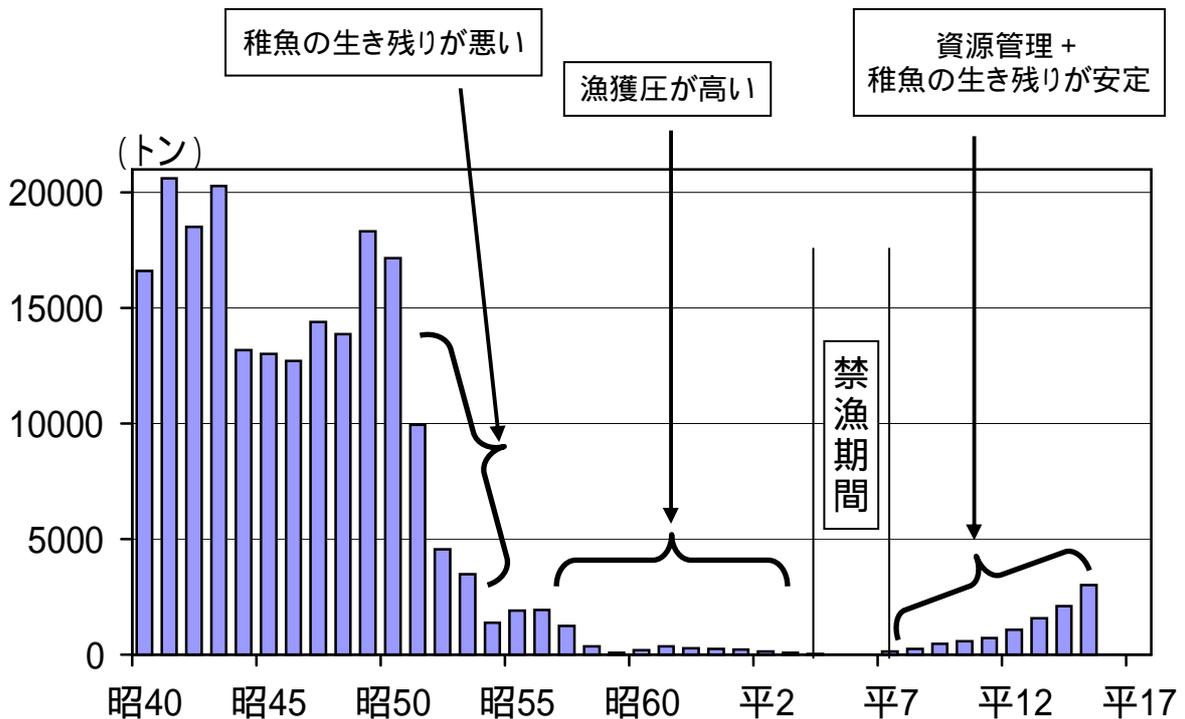


図1 秋田県ハタハタ漁獲量の推移

- ・昭和40年代は毎年1万トン以上の漁獲があったが、昭和51年以降急激に減少し、その後は漁獲のため資源は増えず、3年間の禁漁を実施するに至った。
- ・3年間の禁漁期間以降は、増加を続けている。

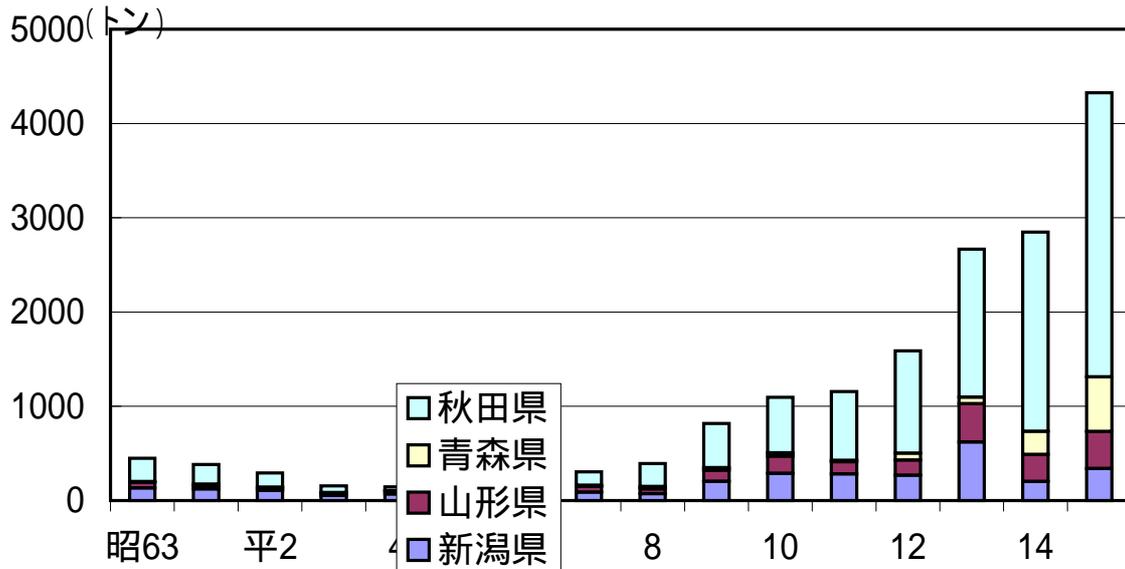


図2 日本海北部4県における漁獲量の推移

- ・4県の合計は前年と比べ、52%増加した。
- ・秋田県の割合は、15年前には55%であったが、徐々に増加し、近年では約70%となっている。

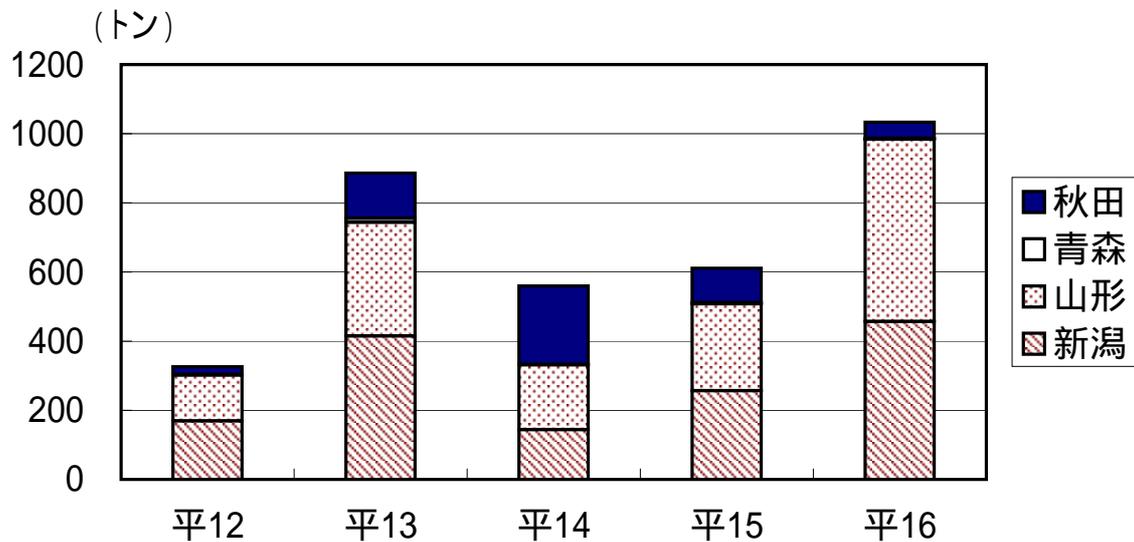


図3 1～6月における日本海北部4県底びき網漁獲量の推移

- ・秋田県は前年の半分程度であったが、日本海北部全体では、前年と比べ69%増加し、過去5年間で最も多かった。

表2 試験操業1回当たりのハタハタ漁獲尾数(CPUE)の推移

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
月	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
1	46.4(9)	35.5(10)	95.2(13)	288.5(16)	521.2(13)	26.2(6)	-	597.8(4)	89.7(6)	469.0(1)	29.8(6)	2.3(4)	17.0(1)	-
2	35.8(6)	5.0(2)	398.3(13)	286.8(4)	189.2(13)	23.5(4)	95.4(7)	126.3(6)	10.2(4)	8.5(2)	21.5(4)	26.5(2)	8.0(1)	196.3(4)
3	59.2(8)	42.3(13)	271.5(11)	226.9(7)	14.1(9)	50.4(11)	389.0(4)	91.3(9)	466.0(3)	33.8(4)	2722.3(3)	92.5(2)	7.5(2)	349.8(5)
4	58.4(2)	22.7(4)	545.5(2)	-	33.2(9)	181.4(5)	496.7(3)	342.5(6)	627.0(4)	31.0(2)	1092.0(1)	47(3)	145.8(4)	306.0(4)
5	-	-	-	-	-	-	210.2(5)	70.2(13)	685.3(4)	150.0(4)	2611.0(2)	5331.2(2)	204.8(4)	1275.0(3)
6	36.0(7)	5.3(3)	0.0(2)	24.0(3)	30.0(8)	45.2(6)	151.4(8)	19.5(11)	58.2(6)	72.2(5)	38.7(3)	3126.7(1)	81.0(5)	765.8(6)
7	1.5(3)	7.4(7)	22.9(8)	29.9(7)	138.8(9)	22.6(8)	-	-	-	-	9.0(2)	-	-	-
8	29.7(10)	12.4(14)	11.5(8)	55.3(7)	115.3(4)	188.0(4)	33.5(2)	149.5(6)	1916.5(2)	105.0(2)	215.0(2)	26.0(2)	1.0(1)	
9	37.8(16)	19.1(9)	113.4(14)	248.0(7)	392.6(8)	88.5(15)	104.0(5)	75.0(6)	90.5(2)	208.0(1)	318.3(3)	29.3(3)	121.4(9)	
10	43.8(12)	56.6(10)	636.7(4)	528.6(5)	82.3(4)	150.8(6)	495.3(9)	98.3(3)	108.6(5)	29.3(4)	295.5(4)	107.3(3)	229.2(6)	
11	76.2(19)	33.6(5)	125.3(7)	528.3(8)	40.4(9)	236.0(9)	452.3(9)	213.3(9)	310.6(5)	110.8(4)	896.5(2)	126.0(1)	2364.0(1)	
12	97.4(13)	195.0(2)	160.4(7)	124.0(7)	42.3(8)	295.6(5)	225.3(6)	335.7(3)	922.0(2)	2060.3(3)	581.0(3)	221.0(1)	6684.0(2)	
1 - 12	53.5(105)	32.2(79)	189.9(89)	246.4(71)	167.9(94)	110.8(79)	283.5(58)	154.2(76)	361.1(43)	275.1(32)	599.5(35)	624.4(6)	112.4(36)	553.5(22)

()内は操業回数

- ・15年12月には過去最高のCPUEを記録した。
- ・16年5、6月のCPUEは高レベルなもの、平成14年よりは低い

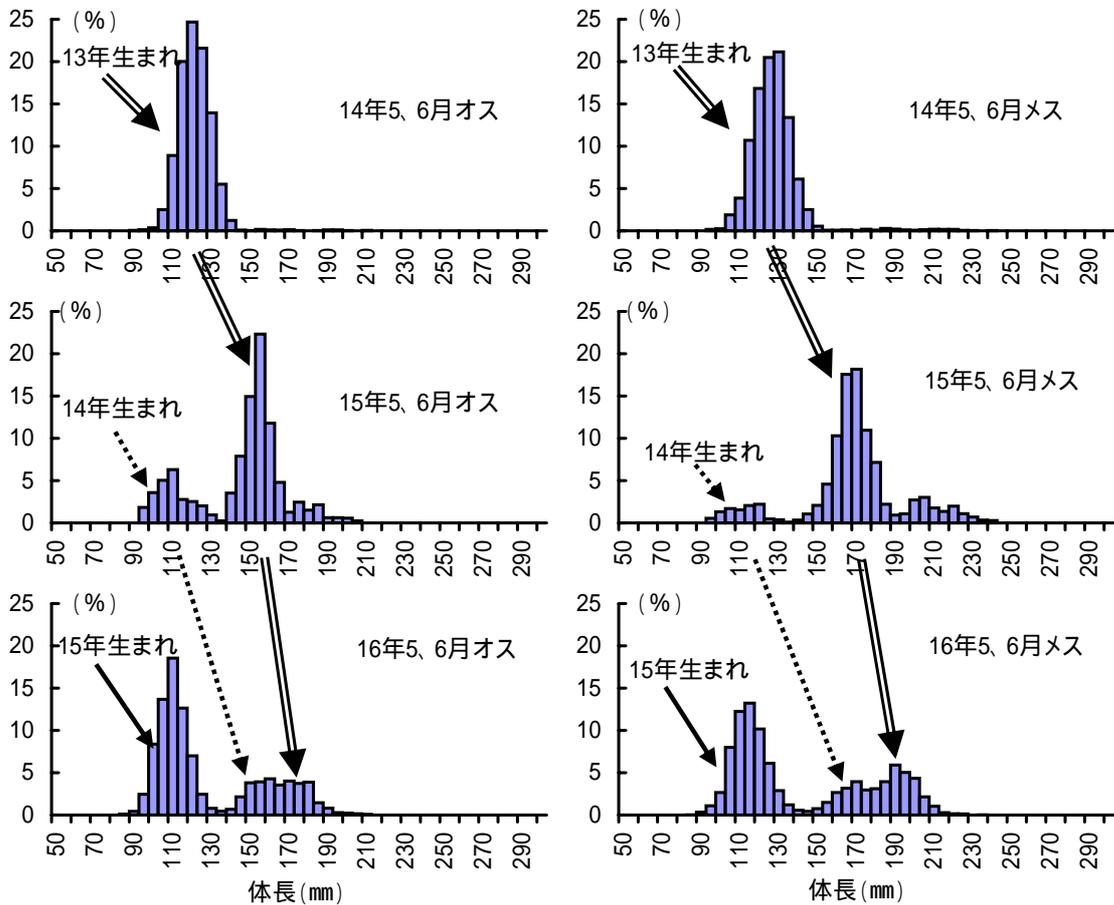


図4 千秋丸底びき網調査結果(5、6月)

- ・13年生まれは非常に多く、現在でもその量は比較的多いと推察される。
- ・昨年と一昨年の漁獲増は、13年生まれのハタハタに支えられていた。
- ・13年生まれは既に高齢魚であり、その量は今後減少すると考えられる。
- ・14年生まれは加入した昨年時点から少なく、今期もその比率は低い。
- ・今年新たに加わる15年生まれの量は、比較的多いものの、13年生まれよりは少ない。

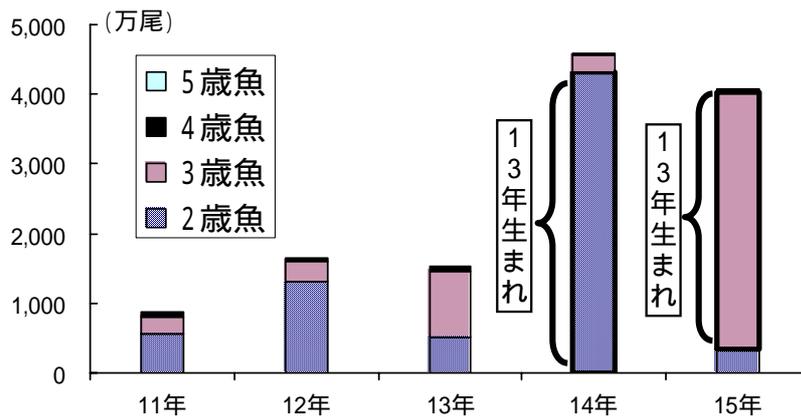


図5 過去5年間における年齢別漁獲尾数の推移

- ・最近2年間で漁獲尾数、漁獲量とも急増した。
- ・最近2年間での急増を支えているのは13年生まれで、2年間の総漁獲尾数の93%
- ・資源が安定している状態とは、年齢別尾数のバランスが保たれている状態であり、現在の資源状態は安定していない。
- ・漁獲のほとんどが2,3歳魚であり、4,5歳まで生き残るものは少ない(自然死亡の影響)。

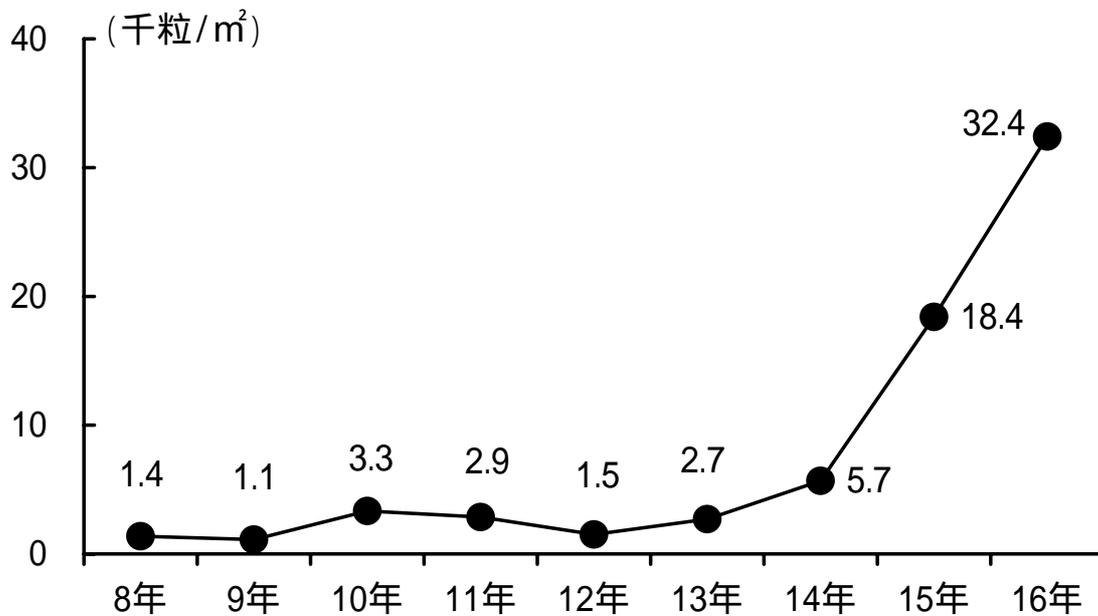


図6 産卵量の推移(北浦地区)

- ・14年以降急増し、16年は解禁直後と比べ20倍以上になった。
- ・15、16年には打ち上げブリコが確認された。

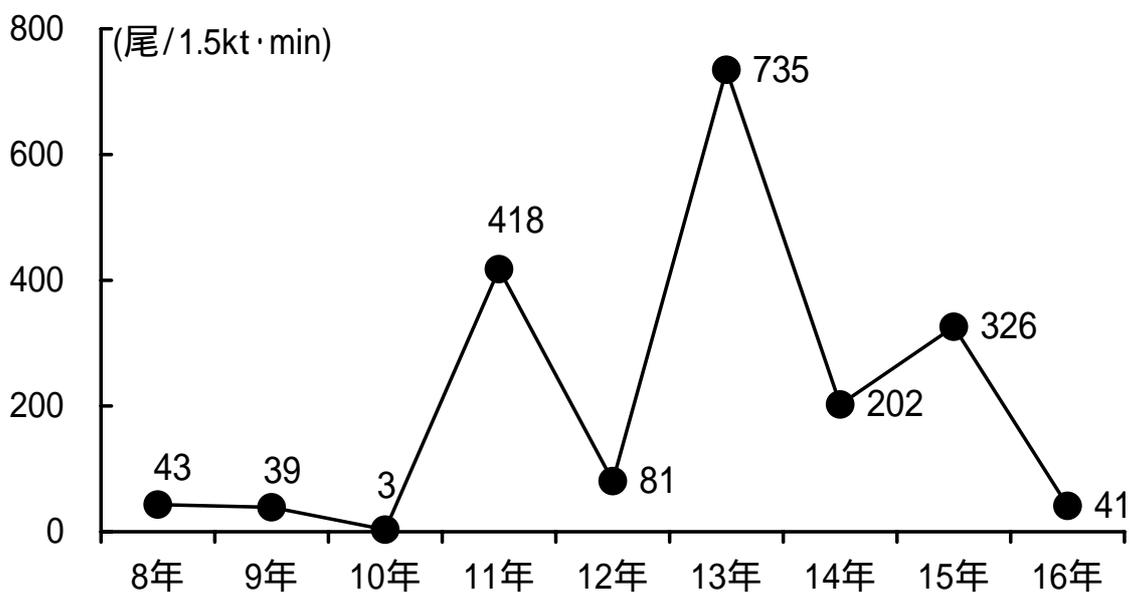


図7 北浦沖の水深20～60mにおける稚魚CPUEの推移

- ・大量の産卵があったものの、稚魚数は近年では最も少なく、H.8、9年のレベルとなった。
- ・こうした稚魚の大幅減耗は、昭和50年代初頭と似た現象であると思われる。
- ・来17年漁期に、この影響が現れると考えられる。

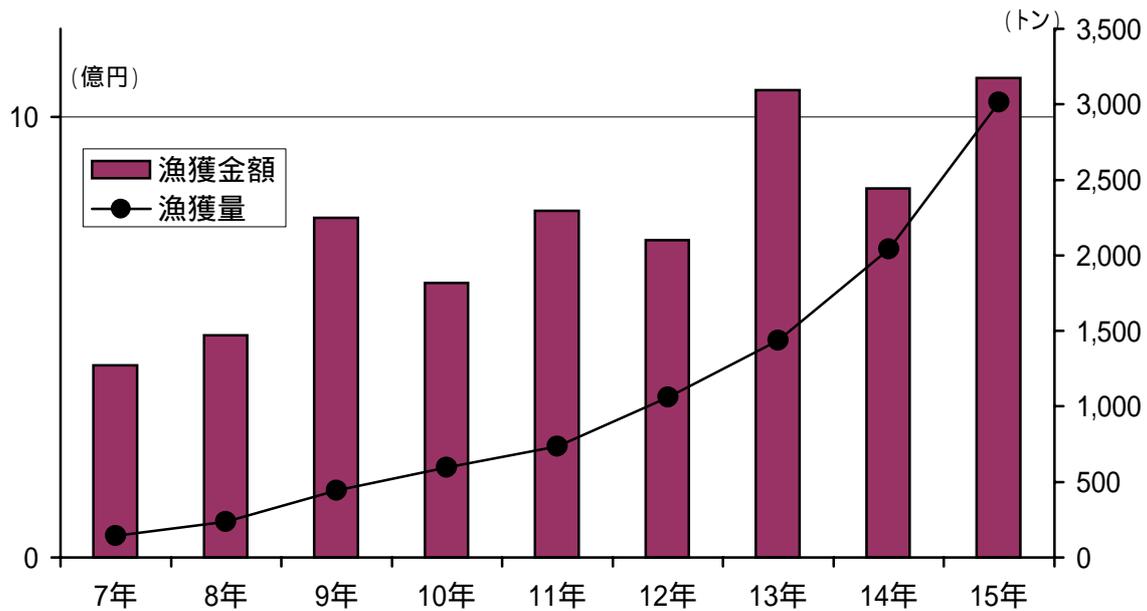


図8 ハタハタ漁獲金額と漁獲量の推移
 ・漁獲量は伸びているが、漁獲金額は10～11億円で横ばいである。

漁獲対象資源量の推定

- ・16年漁期の資源は、昨年取り残した大型の3、4歳魚と、新たに加わる小型の2歳魚で構成される。
- ・新たに加わる15年生まれの2歳魚の量は、稚魚調査及び千秋丸試験操業結果から、解禁後では、13年生まれに次ぐ大きい年級群であると推定される。
- ・解析の結果、年齢別の資源尾数は、2歳魚4千7百万尾、3歳魚6百万尾、4歳魚1千8百万尾と推定され、漁獲対象資源量は約5,000トンと計算された。
- ・17年漁期は、加入する16年生まれは少なく、13年生まれも消滅するため、資源は減少することが予想される。